

文・鳥谷灯子

さとうつぼのアリクイ

絵・山田友貴

けんたの家の台所には、さとうを入れておくつぼがある。つやつやしたせともので、ずしりと重い。いつもぴったりとふたがしてあって、とだなにおさまっている。そのふたをこつそりあけて、中のさとうを指ですくってなめるのがけんたは好きだった。

今日もお母さんがせんたくものを干しているあいだに、さとうをなめようとしたときのことだ。

「ぼっちゃん、そのつぼのふたを開けてくれませんかね？」

とだなの奥からとつぜん声がした。出てきたのは、細長い

顔をした、黒っぽい、細長い体の生き物だった。

「うわあ、なあに？」

けんたはたずねた。

「あたしはアリクイ。アリの巣をほって食べていたら、このさとうつぼに落っこちたんです」

けんたは信じられなかった。だって凶鑑でみたアリクイはイ又より大きいのに、目の前にいるアリクイは手のひらに乗るほど小さい。それにアリの巣からさとうつぼに落ちるなんてことがあるだろうか？

「ほんとうです。今朝このつぼが開いたときに外に出たんですが、それから帰れなくて困っているんです」

今朝つぼが開いたときといえは、お父さんがコーヒーにさとうを入れたときだろう。

「それからずっとかくれていたの？」

けんたはアリクイがかわいそうになった。

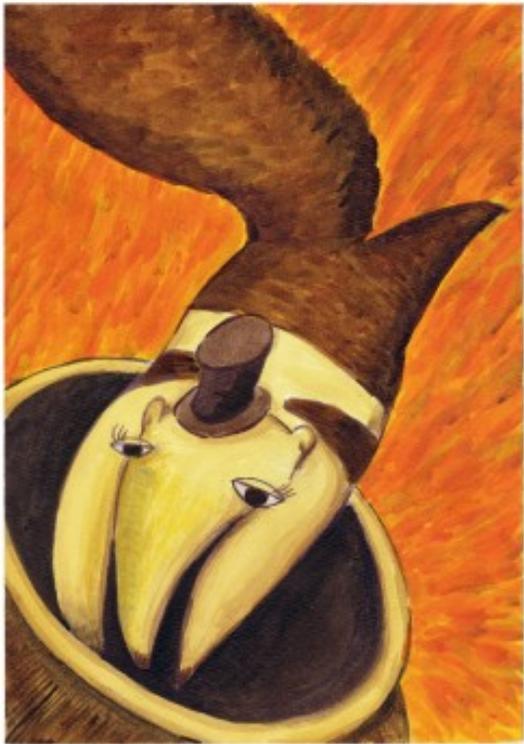
「よくわからないけど、ふたを開ければいいんだね？」

「そうです。ぼっちゃん、おねがいします」

けんたはふたを開けた。

「ああ、ありがたい、ありがたい。ぼっちゃん、どうもありがとう」

アリクイはそう言うと、器用につぼの口に登って、その中に消えた。



けんたは急いでと
だなからさとうつぼ
を取り出して、中を
のぞいてみた。白い
さとうが入っている
だけでアライのす
がたはない。持ち上
げて底を下からのぞ
いてみたが、穴もな
にも空いていない。

「おかしいな」

テーブルにつぼをおいて、スプーンでさとうを掘ってみた。
すぐに底につきあたって、せとものがのぞいた。その表面でな
にかが動いたような気がしてもっとよく見ようとしたときだっ
た。

ぱさり、とまわりのさとうがくずれた。と思つたら、それは
かわいた土だった。ぱらぱらと土が肩に落ち、いつの間にか、
けんたは土の上にいた。あたりは草原だった。

足もとは、大きなアリがいた。けんたのにぎりこぶしぐら
いもある大きなアリだ。

「うわあ!!」

おどろいてとびのくと、柱のようなものに背中がぶつかっ

た。ふりむいて見上げると、けんたの背よりも高い茎の上にタ
ンポポのような花が咲いている。どうやら、さとうつぼのかけ
にいたアライクイのように、今度はけんたがちぢんでしまったら
しい。

でも、低い位置から見上げるけしきは新鮮だ。けんたは元氣
よく歩きだした。

「やあ、ごきげんだね！」

高い木のこずえから小鳥（といってもけんたの半分ぐらいの
大きさ）が羽をふる。けんたも手をふり返した。

そのうちに日がくれてきた。ところでいったいここはどこな
のだろう？ 少なくとも、うちの近所ではなさそうだ。どう

やって帰ればいいのだろうか？

「おかあさん！！！」

けんたはお母さんを呼んで歩いた。そのときだ。くれかかっ
た地平線から音を立てて黒っぽい大きな生き物が走ってきた。

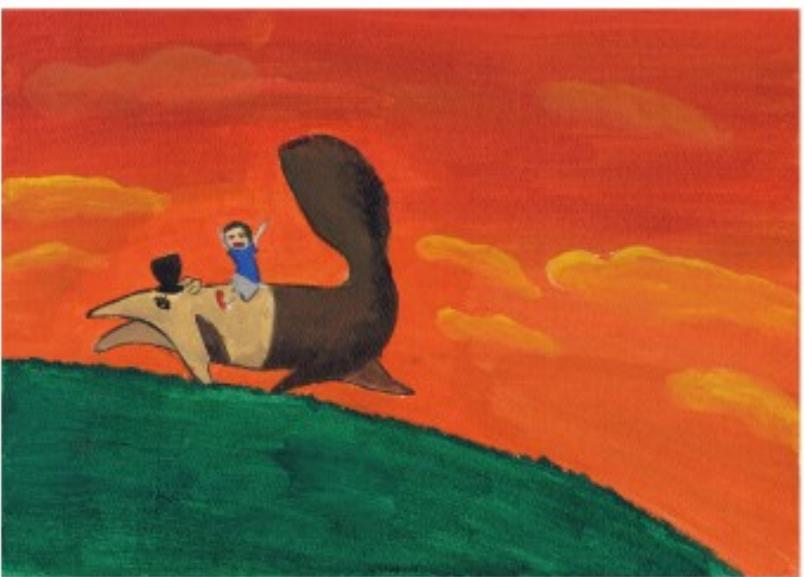
「その声は、ぼっちゃんですか？」

びっくりしたけんたに、その大きな生き物は言った。細長い
顔をしている。

「アライクイ！？」

「ぼっちゃんには、助けてもらったご恩があります。お困りの
ご様子のようなだ、なんでもあたしに言ってくださいな」

「家に帰りたいたいんだよ」



「それなら例のアリの巣を探せばよろしいんで。さあ、せなかに乗った、乗った」

アリクイは器用に鼻でけんたをくるりと持ち上げると、せなかに乗せた。そして夕ぐれの草原をのっしのっしと歩いた。

しばらく歩いてタンポポの花のよこにけんたを降ろした。

「ほら、ここですぜ」

「ありがとう！ アリクイ、またね！」

けんたはアリの巣に足をふみ入れた。足のまわりでかわいた土がくずれた。と思ったらそれは白いさとうだった。さとうつぼの中で、ほりおこしたさとうがくずれたのだ。

外ではお母さんがまだせんたくものを干していた。

さとうつぼのアリクイ

2010年7月10日 公開

文・鳥谷灯子 絵・山田友貴

製作・発行 宵星書房

<http://eveningstar.sakura.ne.jp/>

(c)Toya Touko, Yamada Yuuki 2010



(おわり)